「飲む日やけ止め」でUVケアの新習慣提案

メディキューブ

エステサロンのコンサルティング事業とともに、機能性訴求の化粧品・サプリメントを販売するメディキューブは4月、主力ブランド「BE－MAX」（ビーマックス）からUVフリーサプリメント「同the SUN」（30カプセル4200円）を発売した。同品は、日やけ止めを身体に塗らなくても、1日1～2粒摂取すれば、紫外線保護効果が期待できるサプリメントで、肌が過敏でサンスクリーン剤を使えない生活者にも日常的なUV対策が可能となる。日やけ予防のほか、シミやシワ、そばかす、くすみが気になる女性にも摂取を推奨する。サロンや美容クリニックへ先行発売した後、ネット販売もスタートしている。

主成分として配合する「ニュートロックスサン」は、スペインにあるモンテローダ社が開発したシトラス果実とローズマリー葉から抽出した成分で、輸入原料を取り扱うウィルファームが日本総代理店として販売している。世界では、モンテローダ社のあるスペインで発売を開始してから約3年、現在は日差しの強い北欧や東南アジアでも商品化が進んでいる。

グローバルで商品化が進んでいる背景には、ニュートロックスサンが複数のポリフェノールを豊富に含み、ヒト臨床試験で経口摂取により肌を紫外線から守る効果が認められたことにある。16歳から60歳までの被験者10名の背中6カ所にUVライトを照射し、ニュートロックサン250mgを0mgを85日間、毎日摂取してもらったところ、未摂取時と比べ、紫外線に対する保護力が57日後には34・2%、85日後には56・1%高まることが確認された。

今回発売する「ビーマックス・ザ・サン」には、臨床試験で効果が確認された量と同様の250mgが配合されている。そのほか、ヒドロキシチロソール（ポリフェノール）を20%以上含有するオリーブ葉抽出物「オラリス」、エラグ酸（同）を80%以上含有する「ザクロ抽出物」、メラニンの生成を抑制するアミノ酸「L－システイン」、同時摂取により抗酸化の相乗効果が期待できるビタミンE・C、日光照射によって体内で生成されるビタミンDといった6種類の成分を配合している。

20～50代の被験者11名に、「ビーマックス・ザ・サン」を朝食後2粒、30日間飲用してもらい、肌診断機器で測定したところ、肌のくすみ・シミ度数、キメ・細かさ、水分量、弾力のいずれの試験で改善効果が認められた。またアンケート調査では、摂取4日目には6割以上、10日目には100%の人が、肌のなめらかさやツヤ、毛穴、くすみ、肌色トーンなど何らかの改善効果を実感しており、摂取から早期での体感が確認された。

発売に先駆け、都内で開催した発表会で、同社の稲川龍男社長は「美しく健康な身体づくりを提案・提供する会社として、今年で15年目を迎えたが、その間、『錆びない・萎まない・焦げない』という美肌の3条件を掲げ、サプリメントや化粧品を展開してきた。今回は、紫外線による光老化を防ぎ、焦げない身体づくりを目指せる『飲む日やけ止め』という革新的なサプリメントが誕生した。日常的な紫外線予防の新習慣サプリとして、新たな価値を提案していく」と語った。

稲川社長

MGK

第一印象をよくする髪と肌の色彩に関する学術講演

毛髪科学技術者協会（以下、MGK）は4月23日、都内で第42回定期総会を開いた後、第139回学術大会を開催した。

学術大会の第一部では、美容教育研究所の中川登紀子代表が「なぜ茶髪は不良なのか?～第一印象を左右する髪と肌の色彩学～」をテーマに講演を行った。中川氏は、色の三属性である色相、明度、彩度といった色彩学の基本事項とともに、視覚に生じる錯覚（錯視）の事例を紹介し、ヘアカラーに応用することで第一印象をアップさせる肌色を取り入れる事例を紹介した。

中川氏

錯視には、形と色の2種類あり、色の錯視では、明度・色相・彩度の各対比によって、同じ色であるはずのものが、周囲の影響によって異なる色に見える現象であり、中川氏は「ヘアカラーにも錯視の理論をもっと活用すべきだ」と主張する。ヘアカラーの場合、明度を上げると髪色の色相は黄みになり、彩度は鮮やかに変化する。それに対し、肌色（顔）はヘアカラーとの対比効果により、色相は暗く赤みになり、低彩度に変化するメカニズムを持つ。中川氏は、髪色によって、顔の肌色の見え方が異なる例を写真で紹介しながら、「色の錯視を意識することで、髪色と肌色のバランスが取れ、第一印象がよくなり、多くの人に好まれる顔立ちになる」と語った。

さらに、色の錯視に加えて「色彩の調和理論も取り入れることで、より理想的な肌色に近づけられる」といい、髪色と肌色の均一性および調和、瞳と髪色の調和、適度な明度を意識したヘアカラーの重要性を説いた。

第二部では、脳機能研究所の小林洋平主任研究員が「人間の選好と感性解析～脳科学に基づく新しい試み～」について講演を行った。

MGKの西日本支部は7月、設立40周年を記念し、大阪市内で記念大会および学術大会を実施する。

大会では、独立行政法人理化学研究所の辻孝氏による毛髪再生医療研究に関する学術講演、ヴィーナスプロジェクトの中村浩子社長によるトレンド・流行の作り方についての基調講演などが予定されている。

日光ケミカルズ

医薬品原料展で外用剤の開発支援、新原料も展示

日光ケミカルズは、4月22～24日に都内で開催された医薬品原料の国際的な展示会「CPhI Japan」に出展し、研究員によるセミナーも織り交ぜながら持ち前の技術力をアピールした。

セミナーは、「外用剤まる分かり」と題したテーマで実施し、医薬品外用剤の処方や製剤設計、さらには有用性や安全性に関する評価技術など、商品開発に必要な情報を幅広く網羅した内容に仕上げた。

その中で、グループ会社のコスモステクニカルセンターで研究する宇治謹吾氏は、感触などを高める化粧品の製剤化技術を医薬品外用剤（クリーム剤）に応用する利点について説明を繰り広げた。

具体的には、油と水が何層もの膜になったラメラ液晶構造の技術に触れ、同構造を用いることで通常のO／W製剤よりも保湿性が高まり、また水分蒸散を抑制できることを実際の試験結果を用いて紹介するなどした。そのうえで、さらに研究を進めた結果、「医薬品にも応用できることが示唆された」として医薬品への活用を提案した。

また、天然大豆レシチンをもとに開発した「NIKKOLレシノール」シリーズについても、皮膚水分量の増加や経表皮水分蒸散量の減少、さらには刺激緩和作用があることを示し、製剤化する際に留意すべき重要なポイントなどを解説した。

セミナーではこのほか、薬剤の経皮吸収性を高める製剤設計に関する内容を盛り込んだほか、グループ会社で評価試験サービスを展開するニコダームリサーチの研究員からは、動物実験代替の手法として三次元組織モデルを用いるなどした同社独自の評価技術が紹介された。こうした内容を1つの講義にまとめ、これを3日間で計4回にわたって実施した。

日光ケミカルズの企画担当者によると、同セミナーは昨年に続く2回目の実施で、好評だったという前回の経験を踏まえ「今回はより実践的な内容」にグレードアップさせたという。参加した医薬品や化粧品メーカー関係者にとっては、より商品企画をイメージしやすい内容に映ったようだ。

同社が商品開発を支援する試みとしては、メーカーが研究などに自由に使用できる「開放研究室」を設けている。実際に原料や専用装置などを用いて、実習することが可能だ。

一方、展示会場内のブースでは、セミナー内容に沿った情報発信に努めたほか、新たな原料や処方完成までの時間を短縮できる「三連式乳化試験機」なども展示した。

新原料として展示したのは、フランスの原料メーカー・ソラビア社が生産する植物由来の「ペプトン」だ。微生物の培養に利用されるなど様々な用途があり、特に医薬品の分野で多用されている。ソラビア社は植物由来ペプトンの品揃えが豊富で、日光ケミカルズも植物性原料の販売を大きな柱の1つに据えていることなどから日本市場での紹介を始めたという。同原料については現在、ハラール認証を申請しているほか、サンプル請求も受け付けている。